

歴史と地図 富岡製糸場と養蚕

神戸女子大学 准教授 佐藤 浩樹

1 はじめに

2014年の世界遺産登録をめざしている「富岡製糸場」。明治時代の官営工場の代表例としてどの教科書にも掲載されています（1872年操業）。本稿では、富岡製糸場を事例として、地図帳を活用し、歴史学習に広がりをもたせる授業プランを紹介します。昨年度まで勤務していた群馬県安中市立碓東小学校の子どもたちを想定して作成したプランです。2学期からの授業実践の参考にしていただければと思います。

2 官営の製糸場が富岡につくられた理由は？

歴史の授業で、歴史の舞台になった場所を地図帳で確認しているでしょうか。歴史の授業でも地図帳を毎時間使うようにし、新しい歴史的事象に出会ったら、子どもたちが自分から地図帳を広げようようにしたいものです。

明治政府の国づくりの授業で富岡製糸場を取りあげるときにも、地図帳（『楽しく学ぶ小学生の地図帳 最新版』）で位置を確認させます。p.36または p.37にのっています。富岡製糸場は群馬県南西部に位置する富岡市にあります。歴史の授業で地図帳を活用してきたクラスではp.69～70の主題図（③歴史の舞台になった場所）から富岡製糸場を見つけるかもしれません。

官営工場のモデルとしての富岡製糸場について教科書で学んだ後、富岡に製糸場がつけられた理由を考えさせます。地図帳を見ると富岡製糸場の近くにまゆの記号を見つけることができます。群馬県でまゆづくり（養蚕）がさかんなことが地図

帳からわかります。養蚕がさかんで、良質のまゆがとれたことが富岡に設立された大きな理由であったと推測できます。



『楽しく学ぶ小学生の地図帳 最新版』 p.35～36

次に、まゆや製糸と関係のある製品の記号が富岡製糸場の近くにあるか地図帳で探してみようと投げかけます。子どもたちは、伊勢崎がすりを見つけられるでしょうか。伊勢崎がすりは、残りものまゆや糸を使ってつくった織物で、江戸時代後半には江戸、京都、大阪へ出荷されるほど人気があったようです。このことから、富岡製糸場が生糸の生産がさかんな地域につくられたことがわかります。群馬県の郷土かるたである「上毛かるた」には「日本で最初の富岡製糸」「まゆと生糸は日本一」と読まれています。p.74の都道府県別の統計（おもな伝統工芸品と生産都市）でも伊勢崎がすりを確認します。ここから、各都道府県の伝統工芸品に関心を広げられればと思います。

伊勢崎がすりは、どこをかって江戸、京都、大阪へ運ばれたのかも問います。子どもたちは、五街道の一つである中山道だとわかると思います。地図帳p.70（⑤江戸時代の交通路）で確認させます。この地図で、江戸時代には、安価で大量に運べる船による輸送が重要であったことを押さえておきます。これが生糸の輸送ルートを考える伏線になります。



『楽しく学ぶ小学生の地図帳 最新版』 p.70

3 女性労働者が集まらなかった理由は？

富岡製糸場には全国から多くの女性労働者がやってきましたが、最初は外国人に血を吸われるとあってなかなか人が集まりませんでした。なぜそう思われたか想像させます。

富岡製糸場の首長ブリュナらがワインを飲むようすを見て、生き血を吸うと勘違いされたのだそうです。ブリュナの母国であるフランスを地図帳で確かめるとワインの記号を発見できます。このような小さな活動の積み重ねが、3学期の「日本と関係の深い国々」の学習につながっていきます。



『楽しく学ぶ小学生の地図帳 最新版』 p.59~60

4 生糸はどのように輸出されたか

明治時代初期、生糸は日本の輸出品の第1位になりました。富岡製糸場で作られた生糸はどこから輸出されたか問います。子どもたちは幕末に

開港した港である横浜だと推測するでしょう。地図帳p.37で富岡と横浜の位置関係を確認します。

ここで、「富岡から横浜までどこを通りどうやって生糸を運んだのでしょうか。」と発問します。子どもたちは悩むでしょう。地図帳を見て、ルートと輸送方法を予想させます。

鉄道という予想を立てる子がいるかもしれませんが。新橋－横浜間の鉄道開通は1872年で、富岡製糸場操業と同じ年です。高崎－上野を結ぶ高崎線は、群馬の生糸を横浜へ運ぶことが敷設の大きな理由でしたが、全線開通は1884年です。富岡と高崎を結ぶ上信電鉄の開通も1895年です。八高線や横浜線も同様の目的で計画されましたが、開通はさらに遅く、富岡製糸場の操業開始よりずっと後のことです。

自動車と考える子もいるでしょう。が、この時代に自動車はありません。陸路で輸送する手段は荷車（大八車、馬車）が主力でした。ルートについては、江戸を通過して横浜へ運ぶルートや八王子を通るルートを考えるでしょう。八王子から横浜へいたる道は日本の絹の道ともいわれています。しかし、この道は難路であり、富岡など群馬産の生糸を荷車で運ぶルートとしては十分に機能していなかったと思われます。

では、どうやって生糸を横浜まで運んだのでしょうか。ここで、江戸時代には船が重要な輸送手段だったことを思い出させます。明治初期においては、富岡製糸場で作った生糸の輸送は、船で利根川・江戸川を通過して江戸から横浜へ運ぶのが主力ルートであり、水上のシルクロードともよばれています。(高村直助『再発見 明治の経済』1995 塙書房)

富岡製糸場で作られた生糸の輸出ルートを探ることで、明治時代の交通の発達に対する関心を高め、文明開化の学習へつなげていくことができると思います。いかがでしょうか。